リリカルなのはViVid　～幽霊の汽車の戦士～

アマノアキマサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リリカルなのはＶｉＶｉｄ　～幽霊の汽車の戦士～

【Ｎコード】
Ｎ３８２５Ｙ

【作者名】
アマノアキマサ

【あらすじ】
『幽霊列車』の力を司る戦士『幽汽』。それは何のためにあるのか。それをまとうものは何を思っているのか。

Memory;0「今この日」（前書き）

うまくかけるか。超心配。

Ｍｅｍｏｒｙ；０「今この日」

『新暦００７９年』；ミッドチルダ

世界はいたって平和だ。

「お兄ちゃん。朝だよ。起きてる？」

「起きてるよ、ヴィヴィオ」

このようにかわいい義妹『高町ヴィヴィオ』が起こしに来てくれる。

まぁ、僕は大体起きているので安否確認といったほうが正しいが。

「じゃあ、早くでてきて！もうすぐ朝ごはんだから！」

「は～い」

ヴィヴィオはそう言って僕の部屋から出て行った。

僕もそのあとについて行くように部屋から出る。

「ヴィヴィオ～、レックス～。朝ごはんだよ～」

「はぁーいっ！」

「おはようございます。母さん」

「おはよう～、レックス」

こんな日常が平和でないはずがない。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

Ｍｅｍｏｒｙ；０「今この日」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

僕らの母は『高町なのは』である。
僕とヴィヴィオと母さんは血がつながっていない。
ヴィヴィオは４年ほど前から、僕は１年ほど前から彼女の養子である。

「ヴィヴィオもレックスも今日は始業式だけでしょ？」

「そだよー。帰りに寄り道してくけど」

「はい。僕は一度家に戻ってから散歩するつもりです」

「そう。今日はママも早めに帰ってこれるから、晩ごはんは二人の進級お祝いモードにしようか？」

「いいねー♪」

「はい！ぜひ！」

「それじゃあ～～」

「「「行ってきます」」」

僕は近くにある私立に、ヴィヴィオはＳｔ．ヒルデ魔法学院に通っている。

僕が１４で、ヴィヴィオが１０歳である。

僕は二人と別れ学校に向かう。

「もう一年になるのか……。ヴィヴィオに助けられてから」

僕はポケットから黒い『パス』を取り出す。

「今日はでないといいな……って、いっても空気読めない奴らに何を願ってもだめか」

僕は『パス』をしまい、歩みを止め空をみる。

あの日をこんなにいい天気だったな

僕がヴィヴィオと出会った日は。

Ｔｒａｃｋ；１「記憶喪失なボク」（前書き）

目標時数に達しなかった（ショボン）
どうして人目線でしか書けないんだ？

Ｔｒａｃｋ；１「記憶喪失なボク」

はぁ、はぁ、はぁ

荒い息

俺はとぼとぼ歩いていた

めまいがする

体が重い

体中が痛い

俺はどうしてこんなところにいるんだ？

俺は何をしていたんだ？

俺は力なく倒れ、俺の意識はそこで途切れた

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

Ｔｒａｃｋ；１「記憶喪失なボク」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

ここはどこだ？

目が覚めると僕は知らない部屋にいた。

かなりボーとする。

僕があたりを見渡して現状を把握しようとしていると、女の人が部屋に入ってきた。

「あ！目覚めたんだね。身体痛いとこない？」

「あ、はい」

サイドテールの２０代くらいの女性は僕に質問してきた。

「あのここは……？」

「私の家だよ。ヴィヴィオが道で倒れていた君を運んできたの。二日も寝っぱなしだったんだよ、君」

「そうなんですか……」

倒れていた？どうしてだろう？僕、体丈夫な気がするのに……。

「あ！自己紹介してなかったね。わたしは高町なのは。君は？」

「僕は……あれ？」

「？」

「誰なんだ？」

「はい？」

僕は誰なんだ？なんなんだ？全く思いだせない。

「もしかして覚えてない？」

「は「ただいまママ！お兄さん起きた？」

僕がその質問に答えようとしたとき、女の子が部屋に入ってきた。

「あ！大丈夫ですか？お兄さん！」

「……」

「お兄さん？」

なんだこの感じ。あ、これ既視感だ。僕この子に会ったことがある？

僕が首をかしげていると、彼女は僕のほうをじっと見つめるくる。

「ヴィヴィオお帰り。このお兄さんなんだか記憶がないみたいなの」

「へぇ？」

「名前も思い出せないみたいなの」

「えぇ～～～！！！」

彼女が驚いた瞬間、僕はあることを思い出した。

「レックスだと思います」

「うん？」

「名前です。愛称か本名かは思いだせませんけど……そう呼ばれていたみたいです」

「レックスくんか……。なんか覚えてることあるかな」

「えーっと……何も……」

「そっかー」

僕はようやく働いてきた頭で、思い出そうと頑張った……が何も思い出せなかったのであきらめ淡々と答えた。

「記憶なくなっちゃってるのにすごく冷静だね、レックスさん」

「えーっと、君がヴィヴィオ？」

「うん♪私は高町ヴィヴィオだよ」

「ありがとね。僕拾ってくれて。なのはさんもありがとうございます」

「え？あぁどういたしまして」

「気にしないで。あと当分うちにいて。記憶がないんじゃ帰る場所もないんでしょ？」

きわめて愚問な気がするんですが、なのはさん。

「あ、レックスくん。一応病院行こうか」

「え？」

「検査しとかなきゃ」

とても嫌な感じがした。僕はきっと病院嫌いだったのだろう。
そんな感情に戸惑ってしまっていた僕は、なのはさんに病院へと連れてかれた（ヴィヴィオちゃんも付いてきた）。

「……次元漂流者だったのか、レックスくん」

「家どころか出身世界もわかんない……か」

病院での待ち時間にこの世界（ミッドチルダ）ついて二人にいろいろ教えてもらった。
だが、僕にこの世界（ミッドチルダ）の地理などに該当する知識が全くなかった。おそらく僕はこの世界（ミッドチルダ）の人間じゃないだろう。

「だ、大丈夫ですよ、レックスさん。きっと見つかりますって」

「ありがとヴィヴィオちゃん。僕落ち込んだりしてないから」

病院での検査によってわかったのは、僕が『エピソード記憶』を忘れているということだった。

『エピソード記憶』、つまり『思い出(過去)』が僕にはないことになる。はたからみればショッキングなことだが、こちらからすると大したことがない気がする。
いや、現象は大したことだ。僕が言っているのは精神的面でだ。
もともとこの世界(ミッドチルダ)にいなかったのだから、誰と会おうと初対面なのだから忘れてしまって申し訳ないという気持ちに駆られない。まぁ元の世界に残してきてしまっているだろう家族には申し訳ないのだが……。
『エピソード記憶』を失う記憶喪失は、精神的に大きなショックが加わると起こることがあると噂で聞いたことがある（いつどこのかは知らないが）。
つまり、思い出さないほうが幸せな過去が僕にはあるかもしれないということだ。
それから考えると最悪二度と会えないだろう。
まぁ、それでも記憶は取り戻すつもりだが。
逃げてもしょうがないもん、自分(じぶん)の過去なんだから。

「まぁ、何らかのきっかけで思い出すかもしれないから心配しなくていいよ、レックスくん」

だから僕は極めて落ち着いていますって……こういうセリフはく奴ほど落ち着いてない気がする……。

「さぁ、二人とも帰ろ」

その晩

「……何かな？この不愉快な気配は？」

僕は何らかの不快感を感じていた。

「イマジン？」

ふと口からこぼれた言葉。

その意味は……？

なんだっけ？

なんだか重要なことだった気がするが思い出せない。

思い出そうと必死になっていると、いつの間にか不快感は消えていた。

「嫌な予感しかしないな……早く記憶取り戻さないと」

明日からいろいろやってみようと心に決め、僕は眠りについた。

同刻　ミッド北部

『お前の望みを言え。どんな望みもかなえてやる。お前の払う代償はたった一つ』

砂のお化けが一人の人の前に現れ、悪魔のようなささやきをする

「――――――を探して私のもとへ」

人は自分の望みを言った。

『了解した』
砂のお化けは怪人となり暗闇に飛び去って行った。

翌日朝

「え？倒れてたところに案内してほしいんですか？」
「そう。なんか思い出すきっかけになるかもしれないからね」
僕は朝食前に、ヴィヴィオちゃんにお願いしていた。
やはりきのうの不快感が気になる。嫌な予感しかしない。
「わかりました。じゃあ、1時間後ぐらいに出かけましょう♪」
「あ、ヴィヴィオ。レックスくんと出かけるの？」
なのはさんが三人分の朝食を持ってキッチンから出てきた。
僕は手伝いますと言ったのだが、座っててと断った上に僕に何かする隙を与えくれなかったのであきらめた。
なのはさんいったい何者なんだ？
「うんそうだよ～」
「じゃあミッドを案内してあげて、いろいろ知っておいたほうが便

利だからね」

「わかった～」

「お手数掛けます」

～約1時間後～

「行ってきま～す」

「行ってきます」

「行ってらっしゃい。二人とも気をつけてね」

僕はヴィヴィオとともに町に出た。
まず向かうは僕が倒れていた場所。僕がこの世界に痕跡を残している場所は高町家とそこだろう。
ヴィヴィオちゃんは歩きながらこの地域のことを説明してくれている。
ヴィヴィオちゃんとはかなり仲良くなれた。結果、彼女の口調によそよそしさはなくなった
彼女は性格も容姿もかわいい女の子だ。
だが、変だ。
何が変かと訊かれたらと極めて説明しづらいが、他者とは何か違う。
もちろんなのはさんとも違う。

「それで――――。……聞いてる？レックスさん！」

「！ごめん。きいてなかった」

「もぉ～。考え事するのはいいですけど、人の話は聞きましょうよ～」

「次から気をつけます」

「ふ～ん」

機嫌を損ねてしまった。……ん、こんなこと前にもあった？

「ヴィヴィオちゃん」

「なんですか？」

「僕と会ったこと本当にないの？」

「ないですよ。あそこら辺で行き倒れてたレックスさんを見つけたのが初めてですが？」

ヴィヴィオちゃんは公園近くの道を指さしながらそう断言する。やはり気のせいか。

「そう。ありがとう。それで僕はあそこで倒れてたの？」

「そうですよ～」

僕は現場に向かいながらヴィヴィオに尋ねながらあたりを見渡した……。

……あぁ、やっぱここにあったんだな。

？なに？

「？なんか言いましたか？」

「え？いいや。……公園も見て行ってもいいかな？」

「もちろんですよ！」

ヴィヴィオちゃんと僕は公園をまわった。

「ヴィヴィオちゃん。ちょっと僕トイレ行きたいから待ってくれる？」

「はい」

僕はヴィヴィオちゃんと別れてトイレに向かうと見せかけて最初の場所に向かい、茂みに近寄った。

「みつけた。僕のパス」

僕はあたりに誰もいないことを確認してからパスをポケットに拾い上げた。

これを何に使ったのかはまだ思い出せないが重要なのは目に入ったときから気付いていた。そしてその存在をあの子に知られるわけにはいかないと思った。だからこうやって一人になる口述を作ってここに来たのだ。

無事回収できたのでヴィヴィオちゃんのもとに帰ろうと思った時。

「イマジン？」

また昨夜と同じ不快感。だがより強く体中に感じる。

もしかして近い？

ヴィヴィオちゃんが危ないかもと直感的にそう思った。

「きゃぁぁぁーーーーー」

「！？」

悲鳴はヴィヴィオちゃんのものだった。僕の直感はあたってしまった。

「助けに行かなきゃ」

僕がそう思うと何の前触れもなくベルトが腰に巻きついた。
ベルトはなぜかバックル部分がかなり大きく金色だった。

「なにこれ？」

とつぶやくながらも、僕はなんとなく右手に持っていたパスをバックルにかざした。
すると僕は一瞬にして鎧に包まれた。

「なにこれ？」

二回連続このセリフ。
だがこれならイマジンと戦える。
そう確信し悲鳴の聞こえたほうに走って行った。

Ｔｒａｃｋ；１「記憶喪失なボク」（後書き）

感想募集です

Ｔｒａｃｋ；２「幽汽参上」（前書き）

書き方変えました。
Ｔｒａｃｋ；１はいつか書きなおします。

Ｔｒａｃｋ；２「幽汽参上」

オッドアイの女の子、高町ヴィヴィオは『怪人』に出会ってしまった。
『怪人』はワニのような姿をしており右手には大きな剣が握られている。

（なにこの怪物！）

そいつは明らかに殺気を出していた。
ヴィヴィオは構えの姿勢を取った。
彼女はこの『怪人』の話や噂を聞いたことがなかった。
だから何の目的で自分が狙われるのかわからなかった。

「我が契約者はデバイスを御所望なのだ。黙って渡せば命は助けてやるぞ、小娘」

「デバイス？」

この『怪人（アリゲーターイマジン）』はデバイスを求めているらしい。渡せばこの危機的状況から解放せれるかもしれない。
だが彼女はデバイスなど持っていない。
彼女の母である高町なのはが教育の都合上持たしてくれていない。

（どうしよう）

頭で考えるが何も浮かんでこない。極度の緊張のためである。

「早く渡せ」

「わ、わたし、デバイス持ってないです！」

どうしようもなくなったので彼女は正直に答えることにした。

「そうか。それは残念だ……まったく無駄に殺さなくてはいけないではないか！」

「！！」

ヴィヴィオはその言葉を聞いた瞬間しゃがんだ。
ブンと音がし後ろにあった木が横真っ二つに斬れる。
ヴィヴィオは目を丸くし戦慄する。

（殺される）

彼女はそう思い走って逃げた。
だが……。

「フン」

「きゃぁぁぁぁぁーーーーー」

今度は地面がえぐり取られ、彼女は転倒してしまった。

「初見で私の斬撃を交わすとはなかなか面白い。だがここで死んでもらう」

『怪人』はゆっくりとヴィヴィオに近づいていき大剣をふりあげた。

彼女は立てず腕で顔をかばうように防御の姿勢を取りながらも、死を覚悟した。

「おりゃーーー！！」

その時掛け声とともに何かが走ってきて『怪人』を蹴り飛ばした。

「え！？」

ヴィヴィオはその正体をみて驚いた。
そこに立っていたのは全身を鎧で固めた幽汽プラットフォーム（以後プラット幽汽）だった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

Ｔｒａｃｋ；２「幽汽参上」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

レックスの変身したプラット幽汽はヴィヴィオをみる。
どうやら目立った外傷はないようだ。

「立てるかい？」

「え、あ、はい」

突然現れた謎の戦士に彼女は驚いているようだったがすぐ正気に戻り、立ち上がる。

「逃げろ。ここは危険だ」

プラット幽汽は彼女にそう伝える。

「でも、わたしここで知り合いを待ってたんです。だからあの……」

ヴィヴィオは自分の身が危険なのにレックスのことを心配していた。

（本当にいい子だな、この子）

絶対この子に手は出させない。彼はそう心に誓う。

「大丈夫だ。そいつも僕が守るから。先に逃げて」

「は、はい」

彼女はこっちを時々振り向きながら走り去って行った。

「よくもやってくれましたね。えーっと……」

「……」

（僕は鎧（コレ）の名前を忘れている。こいつが知っているなら名前を知るチャンスだ！）
彼は自分で思い出すつもりなのだが、名前を答えられないと厄介なことになるかもしれない。
例えば時空管理局の局員が自分のことを調べ始め、名乗らない　名乗れない＝名前を知らない⇒記憶がない人みたいな推理をされると、自分が候補者に上がる可能性だってある。そうなるとなのはさんたちに迷惑がかかるかもしれない。
まぁ、考えすぎであると他者はゆうだろう。

「……電王？」

「ちげーよ！」

即否定してしまった。根拠はなかったが絶対違うと思ったのだろう……口が。

「失礼。あなたはゼロノスでしたか」

「ゼロノスでもないよ！」

また即答。

「じゃあなんですか？あなた」

「僕が訊きたいね！」

プラット幽汽はそう言い放つと腰についていたサヴェジガッシャーを1組取り、ソードモード（以後ＳＳソード）を組み立てながら、

アリゲーターイマジンのほうに駆けていく。
プラット幽汽はすれ違いざまにＳＳソードを振るう。

「くっ！？」

アリゲーターイマジンは大剣を取りこぼす。彼はイマジンの武器[刃]を奪った。
プラット幽汽はすぐに切り返しＳＳソードのオーラソードを相手の首におき、引き抜く。

「ぐあぁあああぁ！」

イマジンは自分の体を作っている砂をこぼしうめき声を上げる。

「誰に手出したか、わかってる？」

プラット幽汽はそう吐き捨て左下から右上へとＳＳソードを振る。
その一撃も食らったアリゲーターイマジンは砂を大量に噴き出し爆発する。

「……」

プラット幽汽はまわりに人がいないのを確認してからベルトをはずし変身を解除した。

（ここにいるとまずいかな？）

レックスはそう思い場所を移動する。公園の敷地から出るとすぐヴィヴィオの姿を探す。緊急事態とはいえ女の子を一人にしておくのは極めて不安だ。

ヴィヴィオを探しながら彼は考え事をしていた。

（幽汽（アレ）が僕のであるのは確かだけど、名前思い出せないな……。あとアレを待っていた時の違和感……もしかしてアレは本来の姿じゃない）

違和感があった。力がなじまないような感じの違和感が。

（なんで？なんで完全じゃない？）

彼は今さっきイマジンを倒している。だが彼はそれを幽汽の本気だとは思っていないようだった。おそらく彼の直感だろう。

（僕が過去（ボク）を忘れているからかな？）

彼が自身の解を出し終わったとき、女の子が視界に映った。金髪でオッドアイ。ヴィヴィオだ。

「ヴィヴィオちゃん！」

「あ！レックスさん！大丈夫でしたか？」

彼女はその表情からレックスのことをとても心配していたことが分かる。

（嘘はつきたくないけどごめん）

「うん。なんか変な格好した人が助けてくれた。ヴィヴィオは大丈夫だった？」

「はい。わたしもその人に助けてもらいました」

「そう。よかった」

レックスは自分が変な格好な人ですとは言わなかった。パスことも
そうだが他人に知られたくないと本能的に思った。

「今日はもう帰りましょう」

ヴィヴィオはけがはないと言っていたが服は汚れている。だから彼
はそう提案した。

「え？でも……」

「ヴィヴィオちゃん服汚れちゃったし、焦ってもしょうがないです
から」

「うん。わかった」

レックスは小さい子を慰めるようにヴィヴィオに言い、彼女はそれ
に従い帰路についた。

二人は家に戻るとレックスは考え事の続きをすると部屋に戻り、ヴ
ィヴィオはなのはをはじめとする管理局員に報告を入れた。もちろ
んイマジンについてだ。

現在お風呂というよりシャワー。レックスの助言だ。

（いったいなんだったのかな～あの人）

ヴィヴィオは幽汽について思いめぐらしていた。

（助けてくれたから悪い人じゃないんだろうけど……）

彼女は幽汽の事も報告していた。だが言ってないこともある。

怪人なんかよりも彼のほうが危険な感じがしたということだ。

（あの人、力があるけど安定してないような気がしたなぁ～）

ヴィヴィオはそこを不審に思いながらバスルームから出る。

服を着てリビングに向かうとレックスがいた。

「レックスさん……？」

彼は考え込んでいるみたいで呼びかけても反応しない。

（むぅ～～～）

初めて会ったときから思っていたが、彼が険しい顔になると胸の奥がむずむずする。だから公園への道のりの中で注意した。

わたしの前でそんな顔しないで

というつもりで。

だが彼は察してくれなかった。まぁ、自分のことでいっぱいいっぱ

いの彼にそんなことを望むのは多少無理がある。
ヴィヴィオはレックスに近づき頬をつねる。
「!?痛い!痛いよヴィヴィオちゃん!」
「そんな険しい顔しない!私悲しくなってくるから!」
「え!ごめん」
「違うの〜!わたしは謝ってほしいんじゃなくて、相談してほしいの!」
レックスはキョトンとしていた。ヴィヴィオは初めてみる顔だ。彼とって彼女の発言は今までの何よりも予想外なことだったのだろう。しかし彼女はそんな彼に構うことなく続けた。
「わたし、レックスさんには笑ってもらいたいんです。だから不安や心配事はわたしに打ち明けてください!きっと少しは楽になりますから!」
レックスは今度は呆けた顔をしていた。そして笑った。
「はぁはぁ。九歳の女の子に心配されるなんて、情けないの僕」
彼は自分をあざけっていた。そして……。
「ヴィヴィオちゃん。ありがとう。今度からそうさせてもらうよ。あとヴィヴィオちゃん、君をなんかあったら言って。記憶なくたって僕は君の役に立てるように頑張るからさ」

「うん！」

「ところでヴィヴィオちゃん。今日のワニ怪人とあの戦士についてどう思う？」

「？あれ？さっきまでそのこと考えてたんですか？」

「そう。戦士のほうは悪い人ではなさそうだけど、ワニ怪人のほうはあからさまに悪者だったよ。そんなのが出たところにヴィヴィオちゃんを一人にしておいたなんて……という後悔に対する反省を帰ってから延々と続けてたんだ（嘘だけど）」

「そ、そうだったんだ。てっきり記憶のことで悩んでるのかと……」

「ヴィヴィオちゃん。僕は過去（じぶん）のことで悩んだりしないよ。悩むんじゃなくて解析するから。『過去にとらわれないが二の舞は踏まない』それが今の僕のポリシーさ」

レックスは堂々と言い切る。ヴィヴィオは彼の勢いに驚きながらも見蕩れていた。

（レックスさんなんかかっこいいな……）

その時突如ヴィヴィオの通信端末が鳴る。

「あ。オットーからだ」

「オットー？」

「うん。わたしの知り合い！なになに、明日無限書庫での調べ物にご協力してくださいませんか。か」

「無限書庫？」

「大きな図書館のことだよ」

ヴィヴィオがそう説明するとレックスは目を輝かせる。どうやら書物に対する好奇心は旺盛のようだ。

「ヴィヴィオちゃん、そこ行くの？」

「うん」

「じゃあ僕も連れてってくれない？」

彼は興味しんしんという顔だった。ヴィヴィオはもちろん断らなかった。

Ｔｒａｃｋ；２「幽汽参上」（後書き）

感想募集

設定１

作者「設定資料公開だ！！」

幽汽プラットフォーム
【身長】　１８０センチ
【体重】　８５キロ
【パンチ力】　２トン
【キック力】　３．５トン
【ジャンプ力】　一飛び２０ｍ
【走力】　１００ｍを１０秒
幽汽のベース。
サヴェジガッシャーショートソードモード（ＳＳソード）を使用。
注）ＳＳソードはデンガッシャーソードモードと同じものです。

作者「以上だ！短！」

レックス「だったらなんで書いたんですか！」

作者「だってやってみたかったんだもん！」

レックス「駄々っ子か！あなたは！」

作者「ついでにレックス（うそつき）くんの資料も公開しておこう」

レックス「あなたには言われたくないです！」

レックス（おそらく愛称）
本編の主人公
１４歳（推定）
記憶喪失

レックス「……終わりですか？」

作者「うん」

レックス「スズメの涙の文字数だ！なんで書いたの！」

作者「練習だよ。文字うちの」

レックス「もっと長いのでやれぇぇーーー！」

作者「読んでくれているみなさん。作者です。私は若輩者なので改善すべき点やアドバイス、イマジン案などを募集しております」

レックス「なんか宣伝し始めたよ」

作者「最後にみなさん。読んでくれて本当にありがとうございました」

レックス「ありがとうございました」

注）この文章はレックスのキャラづけのために行っています

Ｔｒａｃｋ；３「無限書庫とレックスの知識」（前書き）

短いな〜

Ｔｒａｃｋ；３「無限書庫とレックスの知識」

「ここが無限書庫？」

「そうですよ～」

レックスとヴィヴィオは時空管理局本局にある無限書庫に来ていた。

―無限書庫《Ｉｎｆｉｎｉｔｙ　Ｌｉｂｒａｒｙ》とは、管理局の管理を受けている世界の書籍や情報の全てがストックされる、次元世界最大のアナログデータベース。その名の通り、無限に本棚が広がっている。

レックスはその広さと蔵書量の多さに驚くとともにあることに驚いてた。

（入室管理システム（レックス命名）がヴィヴィオちゃんのこと司書って言ってたけど……９歳で？）

彼はヴィヴィオの持つ肩書にびっくりしていた。

（他者とは何か違うと思ってたけど、このことが関係してるのかな？……無重力って体軽いな……）

彼がそんなことを考えている間ヴィヴィオは無限書庫にいた人々に挨拶していた。彼女は有名なようだ。

少し進むと散切りの茶髪に中性的な外見をしている若い男性のところについた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

Ｔｒａｃｋ；３「無限書庫とレックスの知識」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「オットー。来たよぉ～！」

ヴィヴィオは彼をオットーと呼んだ。

「あぁ、陛下。御足労いただきまして光栄です」

オットーはそうヴィヴィオに返した。

ヴィヴィオは陛下と呼ばれるのが嫌だったようで彼に抗議していた。

「なぜ、陛下？」

レックスは口に出すつもりのない言葉を漏らしてしまった。そのためオットーが彼の存在に気付き話しかけてきた。

「あなたがレックスさんですか？」

「はい。レックスです。以後お見知りおきを、オットーさん」

彼は歳も近そうだからさんはいらないと言うつもりだったがやめた。それはヴィヴィオとオットーのやり取りから行っても無駄と察したからである。

「で、ヴィヴィオちゃんを陛下と呼ぶのはなぜです？」

レックスは今抱いている疑問を解決するためにオットーに質問する。

「あぁ、陛下は『聖王』陛下様だからですよ」

「『聖王』？」

「もぉ～オットー余計なこと言わないの～」

ヴィヴィオはレックスの質問に答えたオットーに抗議をし始める。オットーは再び彼女の抗議に（ただの屁理屈な気がする）応対をする。

そんな中レックスは納得し上にあることを思い出す。

（『聖王』……。ベルカの『ゆりかごの聖王』……。だからヴィヴィオちゃんは人と少し違うのか。納得がいく。だが、なぜ？なぜあの『聖王』がいる？確かて絶えたはずじゃ……）

彼はなぜか『聖王』について知っていた。それに対する知識だけがあった。

「もういいや……で調べ物はどう？」

ヴィヴィオは講義をあきらめ本題に入る。今日はオットーの調べ物と友達のルーテシアさんに頼まれた資料を探しに来たのだ。口論をしに来たわけではない。

「これがまた厄介なもので……どうにもはかどりません。僕なりに全力で調べているのですが……」

オットーはかなり困った様子だった。ヴィヴィオもそれを聞いて唸り同意する。

「壁に書かれたポエムのほうは該当するものがないようで、書いた人の創作っぽいです。追加情報のほうも———」

「トレディアに、イクスね」

ヴィヴィオは彼が言い終わる前に確認を取った。すると……。

「イクス？まさかあの？」

驚きの声を上げたのはレックスだった。二人は彼のほうを向く。彼は驚愕という表情を浮かべていた。隠し事が多いくせにポーカーフェイスはできないのだろうか。

「レックスさん！なにか知ってるんですか！」

「一応ね……。あと確認しときたいんだけど、マリアージュも絡んでくる？」

「えぇ」

オットーの返事にレックスは「やっぱり」と返し知ってることを話し始めた。

「これから話すのはあくまでも僕が記憶してることで真実は違うかもしれないよ。まずイクスだけどそれは愛称で本名はイクスヴェリア、ベルカのガリアの冥王のことだよ。少女の姿をしている不老者ってのが僕の知識にある。で、マリアージュのほうだけどイクスが生み出す人型兵器。材料は人の死体。戦場で敵兵の躯を食い、増殖する人形ってところかな」

その話を聞いて二人は顔を見合わせ、沈黙する。二人とも呆けているようだった。

「……ランスター執務官からの御依頼ですから、物騒なものだとは思っていましたがまさかそこまで……」

沈黙を破ったのはオットーのほうだった。確かにロストロギア、兵器関連で調べるように言われていたがレックスが提供した情報に肝を冷やしていた。

「テ、ティアナさんからの依頼だったの！じゃあ、早く資料をまとめちゃおう！」

ヴィヴィオはレックスが先史ベルカの知識を持っていたことに驚きながら、検索魔法陣をだして作業をし始めた。

無限書庫からの帰り。
ヴィヴィオはレックスといるときは何か話すようにしている。他愛もない会話の中にも彼が記憶を取り戻すカギになるかもしれないからだ。だが今回は違った。

（ベルカの知識があるなら『聖王』のことも知ってるんだよね……）

彼女はそんなことを考えながら彼を不安そうにみる。彼はあちこちと目線を映していて彼女に視線には気付かなかった。彼女はあること心配していた。
彼が『聖王』家が絶えていることを知っているかどうかである。つまり彼女が『聖王』であることが不自然であることに気づいているかである。
彼女は『聖王オリヴィエ』の『クローン』である。別に隠していることではない。だがレックスには言っていない。なんだか怖かったのである。否定されてしまう気がして。

「ヴィヴィオちゃん。君は『聖王』のクローンってところなのかな？」

「！！！」

レックスはいきなりヴィヴィオに核心につくことを尋ねた。
心配事をしていた彼女は彼のほうを振りかえり、無意識に悲しそうな表情を浮かべた。

「心配しなくていいよ。僕は君を否定しない。むしろ肯定するよ」
彼は彼女の眼をじっと見てすぐにフォローを入れた。反応の良さから最初からそういうつもりだったのだろう。
ヴィヴィオはそれを聞き安堵する。
「君は一生懸命生きてる。それを否定する奴はこの世で最も愚かな者だよ。あとそんな奴がいるなら僕がやっつけるから！」
彼は付け足すようにそう言い切る。
不安から解放されたヴィヴィオはそこでやっと口を開いた。
「レックスさん」
「何かな？」
「レックスさんはどうして古代ベルカのこと知ってるのかわかります？」
彼女は彼が記憶を取り戻したかもしれないのでそんな質問をした。
「嫌。さっぱりだよ。知識はだいぶ戻ってきてる気がするけど……」
「そうですか……」
「気にしないで。こういうのは焦ってもしょうがないから」
どうしてからはこんなにポジティブなのかヴィヴィオは疑問に思いながらも二人は家へと足を速めた。

もちろん楽しく会話しながら。

Ｔｒａｃｋ；４「レックスの幽汽」

「僕なんだかもう眠いので寝ますね」

「おやすみなさい、レックスくん」

「おやすみ～」

「おやすみなさい」

レックスはその日早くに自分の部屋に向かった。だが寝るためではない。

（イマジンか……遠いな）

彼はイマジンの気配を感じていた。彼はここ数日いろいろなことを思い出した。

まず自分が特異点であること。たまたまヴィヴィオが『得意』という単語を発したときに思い出した。ホント些細なことだ。

そして自分が戦士であることも思い出した。

その他いろいろ思い出したのだがレックスにとって今最も大切なことが思い出せない。

（ホントになんなんだろ。僕が戦ってきた理由って……）

レックスはそれが過去（じぶん）においての最重要なことは直感的に分かった。だがなかなか思い出さない。

（自分の存在を体現しているソレを思い出さないと鎧のこともまし

て今までのことも思い出せないだろう……だが今はイマジンだ。どう移動しようか）

レックスは自分のベットに人が眠っているように細工してから思案する。抜け出すだけでなく現場に移動しイマジン倒して帰ってきて気づかれないように部屋に戻らなくてはいけない。しかし……

（なのはさんを欺くのは大変だな）

彼の心に隠し事をしていることに対するもう罪悪感はなかった。元いたところでも同じようにやっていたのだろう。

（困ったな～）

彼がパスを取り出し手に持ち寝巻をクローゼットに隠そうとすると……

「あれ？」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

Ｔｒａｃｋ；４「レックスの幽汽」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

マリンガーデン火災現場

「お前がイクスベリアだな」

「イクス下がって」

イクスをみつけマリアージュを破壊したスバル・ナカジマ防災士長は脱出口を探している途中、サイのような姿をしたライノイマジンと対峙していた。

（これヴィヴィオがいってた怪人？デバイス狙いじゃなくてイクス狙いなの？）

彼女はマリアージュのせいでボロボロだ。しかも救助者がいる。そんな状態でライノイマジンと戦うのは利口でない。それは彼女も理解している。

「イクスを狙うのはなぜ！」

「俺の契約者がそいつを連れてこいだと、だから連れて行くそいつを渡せ、小娘」

「（契約者？）契約者って誰よ！」

「知らん」

彼女はライノイマジンに質問していた。ライノイマジンは頭部が星型の棒状鈍器を出しながらも律義にもそれにこたえる。おそらく余裕からだろう。

「早く事を済ませたいんだ。渡さないなら貴様を殺す！」

「「！」」

ライノイマジンは彼女たちに襲いかかろうとするその時。

「「「？」」」

突然汽笛の音がした。そこにいた三人？は動きとめた。そして音のしたほうに顔を向ける。

「「「！？」」」

三人？は驚かされた。突然骸骨の形をした先頭車両を持つ列車、幽霊列車がこっちに向かった走ってきたのだ。そしてライノイマジンは引かれまいと後ろに飛ぶ。

「な、なにこれ！」

「ス、スバル。なんですこれ。今の技術の産物ですか！」

幽霊列車が通り過ぎた後にライノイマジンと二人の間に割って入るかのようにプラット幽汽立っていた。

「あ、あな「お前なんだ！」

スバルがプラット幽汽に尋ねようとするがライノイマジンに邪魔されてしまった。

「……お前なんでこんなことすんの？」

プラット幽汽はライノイマジンの質問を無視し、尋ねた。

「質問に答えろ！」

そんな態度にライノイマジンは怒っている。だから彼は適当に答えた。

「お前の邪魔をするもので答えは？」

「邪魔するな！」

ライノイマジンはプラット幽汽に襲いかかる。プラット幽汽はそれをかわし、スバルたちから離れる。巻き込まないためだ。

プラット幽汽はサヴェジガッシャーをＳＳモードに組み立てて斬る。だがライノイマジンの体・・・というより鎧が固いためダメージになっていないようだ。

「ふん」

「おわぁ」

ライノイマジンが振りおろした棒状鈍器の一撃を何とか受け止めたプラット幽汽は口を開いた。

「お前なんでこんなことすんの？」

「契約を果たすためだ」

「契約の代償って何なんだ？」

「なんだ知らないのか！」

ライノイマジンは開いていた手でプラット幽汽を吹き飛ばした。

「ぐ！」

「よくもまぁそんなんで邪魔してくれるな。まぁいい教えてやろう。過去に飛ぶんだよ！」

「ぐぁああ」

ライノイマジンが武器の頭部から出した炎弾の直撃を受けたプラット幽汽は瓦礫の山へ飛んで行った。

「弱いのに邪魔すんな」

ライノイマジンがスバルたちのほうへ向かう。だが……

「邪魔するなよ」

「お前のおかげで思い出せたことがあってな。お前に礼が言いたい」

プラット幽汽はまたしてもスバルたちを守るかのように立っていた。しかしその雰囲気は何か違っていた。

「何？」

「お前たちイマジンは過去に飛び人の時間を奪う。理不尽に」

「それで？」

「だから俺は『そんな理不尽から人を守りために無慈悲な力をふるって戦う』って決めたんだよ！」

プラット幽汽がそう叫ぶとベルトから音が鳴りだす。言葉を発していなかった二人もこれに驚く。

プラット幽汽はパスを取り出し構えて、

「変身！」

そういってからバックルの前を通した。

《タイラントフォーム》

ベルトはそう電子音声を発した。

Ｔｒａｃｋ；４「レックスの幽汽」（後書き）

また短いな。次回でＳＳＸは終了です。たぶん

Ｔｒａｃｋ；５「お前誰にケンカ売ったのか、わかってる？」

《タイラントフォーム》

その電子音声とともにプラット幽汽の周りに青い鬼火が生まれ、そこから黒いオーラアーマーのパーツが姿を現す。
それらは一回転してそれぞれの部分に装着される。
後頭部のほうから幽霊船の形をした電仮面が青い鬼火とともに現れ変形して装着される。
その直後淡く弱い光と大量のフリーエネルギーが放出される。それは周りからすると強風、スバルたちもライノイマジンも顔を覆う。
そして発生源である者はこう言い放つ。

「お前誰にケンカ売ったのか、わかってる？」

ヘビが模られた海賊の船長帽のような電仮面。
マフラーを模した白ヘビ。
白いスーツに下半身はコート。
そしてなぜか無数のホコリと裂傷。
それらの特徴を持つ幽霊列車の力を司る戦士、幽汽タイラントフォーム（以後、タイラント幽汽）がミッドの地に立った。

「ゆ、幽汽？」

冥王イクスがそう呟いているのに気付かずに。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

Ｔｒａｃｋ；５「お前誰にケンカ売ったのか、わかってる？」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「姿が変わった……」

スバルは目の前に異常な者たちからイクスをかばうようにして呟く。

「お前、何者だ！」

ライノイマジンは目の前に立ちはだかった戦士に再び尋ねる。

「お前の邪魔をするもので、暴君（タイラント）だ」

先ほどと同じようの淡々と答えて腰部にあるサヴェジガッシャーを１組直列に組み立て上に放り投げる。それが落ちてくる前にサヴェジガッシャーをまた１組組み立て投げたほうのパーツと連結させる。フリーエネルギーが加わり、おもちゃサイズから武器のサイズの大剣サヴェジガッシャーソードモード（以後、Ｓソード）にかわりオーラソードが現れる。

「姿が変わったところで俺のやることは変わらん！」

ライノイマジンは棒状鈍器を振り上げながらタイラント幽汽に向かっていく。

「はぁああ」

タイラント幽汽はSソードを振り向く。その斬撃はライノイマジンを舐めるように斬り裂く。
ライノイマジンはその威力で吹き飛ばされる。

「な、なんだ。急に強くなったのか！」

ライノイマジンは幽汽の豹変っぷりに驚く。

「プラットフォームは『僕』であるが、タイラントフォームは『俺』だからな」

タイラント幽汽は意味のわからないことを言う。
タイラント幽汽が自分自身でプラット幽汽は仮の自分であるということだろうか？
誰一人としてその言葉の真意は分からなかった。

「グッ！」

ライノイマジンはプラット幽汽と戦っていた時とは違い劣勢に立たされていた。防戦一方だった。
棒状鈍器を振り終わる前に斬られ、炎弾を打つための距離もとらせない。
タイラント幽汽の今の戦法はカウンターだ。相手に先に動かさせるものの攻撃される前に反撃する。そんな感じだ。

「火災の中に人を長々と置いておくわけにはいかないから、必殺技(いちげき)だ」

ライノイマジンがもう自分のペースにのまれていることをカウンター攻撃で確認したタイラント幽汽はSソードを右手に持ちパスを取り出した。

「スラッシュ」

そう呟いた後パスをターミナルバックルにセタッチする。

《フルチャージ》

ベルトから電子音声を発せられるとともにタイラント幽汽はパスを放り投げる。
その直後フリーエネルギーが変換されターミナルバックルから青白く不気味な鬼火が生まれる。
その鬼火は胴体を通って両腕に移る。
タイラント幽汽は両手でSソード持ち、鬼火も伝導させる。

「はぁぁあああああああああああ！！！」

鬼火が刀身にまとわりつくとタイラント幽汽は雄たけびも上げながらライノイマジンのほうにかけて行き、右上から左下へと振りぬく。
この技は『ターミネイトフラッシュ』だ。直接切り裂く技なのでタイラント幽汽は『ターミネイトスラッシュ』と呼称している。
ライノイマジンはその一撃を棒状鈍器で防御しようとするが、むなしく切り裂かれる。

「ぐぁぁぁぁぁぁ」

ライノイマジンは強打により身体が保てなくなり爆発した。

「……立てるか？」

タイラント幽汽はスバルたちのもとに歩いて行き質問する。

「あ、はい」

スバルはタイラント幽汽の圧倒的な力に呆けていたが火災現場にいることを思い出した。

イクスはなぜかタイラント幽汽を睨んでいた。

「ここから出るぞ」

「こっちです！」

スバルはイクスを背負いタイラント幽汽を誘導する。

脱出できそうな所につくとスバルはイクスを下し砲撃を打とうとする。

「スバル。そんな状態で砲撃を打つんですか？」

イクスはボロボロなスバルの身を案じる。

「俺がやる。どこを狙えばいい？」

タイラント幽汽は代役かってでる。

スバルはそれを聞き答える。

「わかった。ウェーブ」
タイラント幽汽はパスを取り出し再びセタッチする。
《フルチャージ》
フリーエネルギーが変換されターミナルバックルから青白く不気味な鬼火が生まれる。
「はぁあああああああああああ！」
タイラント幽汽は雄たけびを上げ左足を引き左腕にSソードを乗せる。その間にフリーエネルギーの鬼火は刀身に伝導されてゆく。鬼火を纏ったそれをはね上げてから振りぬく。
するとSソードの刀身であるオーラソードから青いエネルギー波が飛び出す。その炎波は無数に分裂しながら指定された場所に直撃し天井に穴をあけた。
「先いけ」
「すみません」
スバルは空中に足場を作る魔法・ウィングロードを出しイクスを運び出した。
タイラント幽汽はそのあと跳躍で火災現場から脱出した。
「私を殺しに来たのですか？幽汽」
「イ、イクス」

避難してからすぐにイクスは真剣な顔でタイラント幽汽にそんなことを言った。スバルはそんな彼女に驚いていた。

「あなたは私のような強大な戦力になるものを消すのが仕事なのでしょ？」

「え！？」

「……仕事とか興味ないね～。俺は理不尽を斬れればそれで」

タイラント幽汽は二人から距離を取りパスを空に掲げた。
すると空の空間が歪み幽霊列車が現れタイラント幽汽と二人の間を走り向けて行った。
そのあとにはタイラント幽汽はいなかった。

「おはようございます」

「おはよう、レックスくん」

「おはよ～、レックスさん。いえお兄ちゃん♪」

「へぇ？」

レックスはマリンガーデンの火災の翌日の朝ヴィヴィオの呼び方にフリーズしてしまった。
青天の霹靂であるため悪くはない彼の頭はなぜそんなふうに呼ばれたのかわからなかった。

「あのねレックスくん起きたばっかで悪いんだけど、話したいことがあるの」

「え、あ、はい」

「レックスくんがよかったらでいいんだけど、うちの子にならない？」

「……？どういう意味ですか？」

寝起きのレックスは本当に頭が回っていない、と高町なのははそう思った。

「だから、私の養子にならないって意味だよ」

「え？」

「きのうに夜ね。ヴィヴィオと話をしたんだけどヴィヴィオはレックスくんにお兄ちゃんになってほしいんだって」

やった頭に回ってきたレックスはヴィヴィオのほうを向いた。

「ダメですか？」

彼女は上目づかいでレックスを見返した。

「……ご迷惑ではありませんかというのは聞くのは話の流れ的には変ですよね」

彼はそんなこと呟くとなのはのほうにむき直り

「これからお世話になります、お母さん」

「うん♪レックスくん」

「やったーーーー！」

ヴィヴィオは本当に大喜びしていた。

この日から記憶喪失の少年は高町レックスとなった。

設定２

ヴィヴィオ「やったーレックスさんがヴィヴィオのお兄ちゃん！」

レックス「うん。これからもよろしくねヴィヴィオ」

作者「兄妹仲良くてよかったよ。まぁそれは置いておいてレックスの幽汽だよ」

タイラントフォーム

【身長】　１９９センチ

【体重】　１１０キロ

【パンチ力】　８．５トン

【キック力】　１０トン

【ジャンプ力】　一飛び５０ｍ

【走力】　１００ｍを４秒

【能力】　ひひひ（ひみつ）

【特徴】

レックスのフリーエネルギーが形になったヘビが模られた電仮面

マフラーの色は白で蛇の形になっている

ヴィヴィオ「？」

レックス「ヴィヴィオに見せないで！」

作者「大丈夫。この回は本編とはつながってないから」

レックス「……それでも――――」

作者「必殺技も公開です」

ターミネイトフラッシュ

幽汽の必殺技

セタッチによってフルチャージし、鬼火状と化したフリーエネルギーを剣に纏わせる強打の総称。

ターミネイトフラッシュ

幽汽の基本技

セタッチによってフルチャージし、鬼火状と化したフリーエネルギーを剣に纏わせ、それを地面に叩　きつけ、地表を砕きながら突き進む強烈な衝撃波をぶつけるという荒技

ターミネイトウェーブ

フラッシュの応用技

セタッチによってフルチャージし、鬼火状と化したフリーエネルギーを剣に纏わせ、それを目標に向かって波導斬として打ち出すという技

空中にいる相手などに使用する

ターミネイトスラッシュ

フラッシュの崩れ技

セタッチによってフルチャージし、鬼火状と化したフリーエネルギーを剣に纏わせ、切り裂くという単純な技

ファントムインパクト

セタッチによってフルチャージし、鬼火状と化したフリーエネルギーを手または足に纏わせ、殴るまたは蹴るという格闘技

応用が効きやすい

ファントムバイト

タイラント幽汽のインパクト

セタッチによってフルチャージし、鬼火状と化したフリーエネルギーを両足に纏わせ、挟むように蹴るという格闘技

作者「こんなとこですね」

Ｍｅｍｏｒｙ；１「覇王との出会い」

『新暦００７９年』；ミッドチルダ

「死神の騎士『幽汽』とお見受けします。私は貴方に確かめたいことが」

『タイラント幽汽』こと『高町レックス』は通り魔（ストリートファイター）に絡まれていた。

「はぁ～。散歩に出たらイマジンでるし、倒したと思ったら今度は通り魔ですか～。ついてないですね」

レックスはいつもの口調で自分の不幸を呪い、膝を曲げて落ち込む。レックスは正体がバレないように戦うときは過去の声音と口調を使う。だがあまりにもついていないので演技を忘れてしまっていた。

「で、確かめてぇことって？」

だがタイラント幽汽はすぐに立ち上がり通り魔を睨む。

「……己の強さを確かめたいのです」

彼女はそう言って構えをとった。「かーなーりやる気だ」みたいな感じで。

「はぁ～～～～～～～」

レックスは大きくため息をついた。

「？」

「僕はイマジン退治とかで忙しいですほか当たってください！」

そう言って彼はパスで夜空に仰ぐ。

どこからともなく列車が現れむきあっている二人を轢いて？タイラント幽汽だけ拾って去っていった。

「……」

一人取り残された通り魔は黙ってその場後にした。

「次こそは必ず相手をしていただきますよ、『幽汽』」

彼女の呟きは暗闇に消えていった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

Ｍｅｍｏｒｙ；１「覇王との出会い」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

通り魔に絡まれた次の日。

（僕が高町家の一員になってから一年あまり。僕は思い出以外の記憶をいろいろと思いだした。
まずまじめにイマジンについて、そして『幽汽』ついて。
『幽汽』のことは後々話していくということにして今は語らない。
イマジンについては未来から自分の時間を手に入れるためにやってきた侵略者って説明が妥当だろう。
僕はそいつらから『今』を、大切な僕の時間を守るために戦っている。
僕は現在１４歳ということになっており近くの高校に通っている。
本当はＳｔ．ヒルダ魔法学院（ヴィヴィオのいるとこ）に行きたかったが魔力ゼロで魔法学院に行くのは無理そうなので早々にあきらめた。）
などと自分の今置かれている環境をなぜかおさらいしていた。

「お兄ちゃん♪いこ♪」

ヴィヴィオはそんな彼を催促する。
レックスは今日ヴィヴィオとともにイクスの見舞いに行くことになっている。
イクスは一年前から眠り続けている。機能不全らしい。

「行ってきま～すぅ」

「行ってきます」

「行ってらっしゃい」

ヴィヴィオとともに家を出たレックスの目にウサギ人形が映る。
ヴィヴィオ用のハイブリッド・インテリジェント型デバイス『セイクリッド・ハート』。愛称は『クリス』。

しかし小人が飛んだりウサギのぬいぐるみが飛んでたり、変な世界である。

（あいつが来たおかげで母さんの抜けたところを見る羽目になったな・・・）

昨晩・通り魔に会う前、自宅にてヴィヴィオは試運転の際にヴィヴィオは大人モードになった。レックスは見慣れていたが、あいにく高町なのはの親友であるフェイト・Ｔ・ハラオウンはそのことを知らず大慌てだった。

「あ！ノーヴェたちだ！お～い」

ヴィヴィオはナカジマ家四姉妹を見つけ手を振る。
彼女たちもイクスと彼女らの兄弟のいる聖王教会本部に行くのだ。
彼らは談話しながら目的地に向かった。

「通り魔に遭った？」

「遭ったというか見かけたというか……」

実際はケンカを売られたが幽汽の姿だったので見かけたといったほうが正体がばれづらいとレックスは考えてノーヴェに言った。

「幽汽にケンカ吹っかけてるところを見たんですよ……」

「幽汽に？」

去年のマリアージュ事件以降幽汽とイマジンの存在は管理局に知られ、ミッドにでも『幽霊の騎士』と『砂の怪人』という噂として広がっている。

「そうか幽汽に……。どんだけの戦闘狂なんだよ……」

ノーヴェはそういって身震いする。管理局ではイマジンと戦うのは死を意味し、それを圧倒する幽汽と戦うのは地獄旅行を意味指す。そのため幽汽に手を挙げた通り魔は何も知らない無知か戦闘狂ということになる。

（普通は無知のほうだと判断しますが？）

彼はそう思いながらも口にすると厄介なことになるので言いはしなかった。

イクスへの見舞いの後ヴィヴィオたちとともに途中ヴィヴィオの友達のコロナ、リオと合流して中央第４区の公民館に向かった。

「レックスさんもやられるんですか？」

「まぁ～ね」

リオはレックスの参戦に意外そうであった。

「なんだレックス。リオと知り合いだったんだろ？」

ノーヴェは彼がリオにストライクアーツをしているところ見せていなかったことに驚いていた。

「リオと会ったのは無限書庫なんだよ」

「ヴィヴィオ以上に文系だと思ってましたよ」

「そう見えてもお兄ちゃん強いんだよ」

「へぇ～」

リオはまたとても意外そうだった。

「まぁ、百聞は一見に如かずだ、レックス早速だが組み手やるぞ」

ノーヴェは肩を回しながらレックスに促す。

「はいはい」

結果から言うと引き分けだった。

（あんまり本気でやると幽汽のときに戦闘スタイルになっちゃうからダメだし負けるのはなんだか癪だし……）

そんなことを考えていたレックスではあった。

（中途半端な強さなんだよな、僕。圧倒的な差がないから『手を抜いて勝ち』ってのをノーヴェからとれないんだよなー。もうちょっとまじめに鍛えようかな……）

イマジンと戦っているのは自分だけ。つまり自分が負けてしまったら終わりなのだ。負けるわけにはいかない。

そんな時またイマジンの気配がした。思わず険しい顔になる。

「どうしたのお兄ちゃん、険しい顔して」

「いや、先帰ってて少し走ってくるから」

レックスは逃げるように走っていった。

「なぁウェンディ」

「なんスか、ノーヴェ」

「通り魔ってレックスじゃないよな？」

「？」

レックス＝幽汽でなく、レックス＝通り魔？という構図がノーヴェの頭の中には構築されていた。

《フルチャージ》

「ふん」

「ギィィィ」

「最近こいつらがやけに多いな」

タイラント幽汽が倒したのはプラットフォームに似たイマジンだった。ここのところこいつと同じ型の奴がきわめて多い。

「なんか嫌な予感がするな」

「うわぁ……幽汽」

突然後ろから声がしたので振り向くと嫌そうな顔をしたノーヴェがいた。

（なんでここにノーヴェがいんだよ）

そんなことを考えて始めていたタイラント幽汽は次の瞬間思考を停止させることになった。

「ストライクアーツ有段者　ノーヴェ・ナカジマさんと死神の騎士『幽汽』とお見受けします。私は貴方がたに伺いたいことと確かめたいことが」

今後のレックスの生活にかかわってくる通り魔・覇王の登場であり、しっかりとしたエンカウントだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3825y/

リリカルなのはViVid　～幽霊の汽車の戦士～

2011年12月31日22時50分発行